



TITLE:

京都大学西部課外活動施設建設 (2期)にともなう発掘調査:説明会 資料

AUTHOR(S):

京都大学文化財総合研究センター

CITATION:

京都大学文化財総合研究センター. 京都大学西部課外活動施設建設(2期)
にともなう発掘調査:説明会資料. 2009

ISSUE DATE:

2009-03-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/151836>

RIGHT:

京都大学西部課外活動施設建設（２期）にともなう発掘調査 説明会資料

| |
|--------------------------|
| 遺跡名：吉田泉殿町遺跡 |
| 所在地：京都市左京区吉田泉殿町（図１） |
| 調査面積：約 1130 ㎡ |
| 調査期間：平成 20 年 11 月 2 6 日～ |

今回の調査区は、前回（１期）調査区の西隣りにあたります。前回調査区の東南部では、石敷きと掘り込み地業をともなう鎌倉時代の建物跡が見つかっており、西園寺公経の営んだ別邸吉田泉殿の建造物に相当している可能性が高いと考えられました。

今回は、主な中世の遺構として、おおむね北東－南西方向にはしる浅い流路状遺構 2 条のほか、玉石を敷きつめた遺構、掘立柱建物、井戸などが見つかっています（図 2）。このうち流路状遺構には景石（庭石）が配されていたことから、単なる自然の河道ではなく、庭園を構成する遺構であるとわかりました。これら流路は、出土遺物や層位的な関係から、おおむね13世紀代に機能し、14世紀後半以降には廃絶していると認定できます。こうした存続期間からみて、自然地形を巧みに取り込み造営した吉田泉殿の庭園の空間を構成する遺構であったと考えられます。

〈遺構概略〉東側をはしる**流路 1**は、幅 5 m深さ0.5m程度。大きさ 1 m程度の景石（庭石）が置かれ、岸を護岸状に補強したかのような箇所が認められました。全域で底に精良な黄白色の砂が10cm程度埋積しています。景石周辺では14世紀後半代の大量の土師器が廃棄されて、その上部を埋めています。この流路の東側一帯の高まりでは、柱穴や集石などの遺構が密に分布していますが、具体的な建造物の配置などを復元するには至っていません。

尾根状の高まりを挟んで西側をはしる**流路 2**は、幅 6 m深さ0.2m程度と浅く、両岸に対となるような大きな平石が置かれていました。底には砂利混じりの白色粗砂が埋積しています。この流路 2 の西側一帯は平坦地がひろがり、掘立柱建物の存在を示す根石や柱穴の並びがみられます。

玉石敷き遺構も上記の平坦地にあり、1.5m四方面程度の範囲に、白色や赤色の円い石を敷き詰め、湿ると美しい色合いを示します。上面や下部には13世紀半ばころとみられる土師器の廃棄をともなっていることから、祭祀遺構の可能性あります。鎌倉時代の貴族の嗜好をうかがわせる興味深い遺構です。

〈地誌との対応〉『山城名勝志』（1705年）など江戸時代の史料には、当時にも泉殿の池跡が痕跡をとどめていたことを示す記述があります。18世紀末前後の吉田村の土地区画や字名を知ることができる『山城国吉田村古図』に今回の調査地点を当てはめると、地割が不整形に乱れた箇所が調査区の東半部に相当していることがわかります（図 3）。そこは「字牛ノ宮」中に飛び地としてある「字和泉」であること、今回出土の景石は江戸時代の地層に達する高さであって、そのころでも地表面に頂部が表れていた状況が発掘の所見でも確認されること、から、江戸時代史料が示す泉殿旧跡とは、今回の調査区東半の流路状遺構が埋没しきらず残存していた状態を示しているものと想定されます。

〈小 結〉今回の調査で、庭園的な空間の存在が明らかとなったことから、調査地一帯が吉田泉殿の敷地内にあたることは確実となったといえます。とくに北方を中心に、寝殿造系の建物や苑地がひろく展開していたものと予想されます。鎌倉時代の貴族邸の具体像については、いまだ断片的な調査成果しかなく、今回広域での様相が把握可能となったことは、考古学のみならず、中世京都の歴史復元にとって重要な情報を提供する大きな意義のある成果といえます。

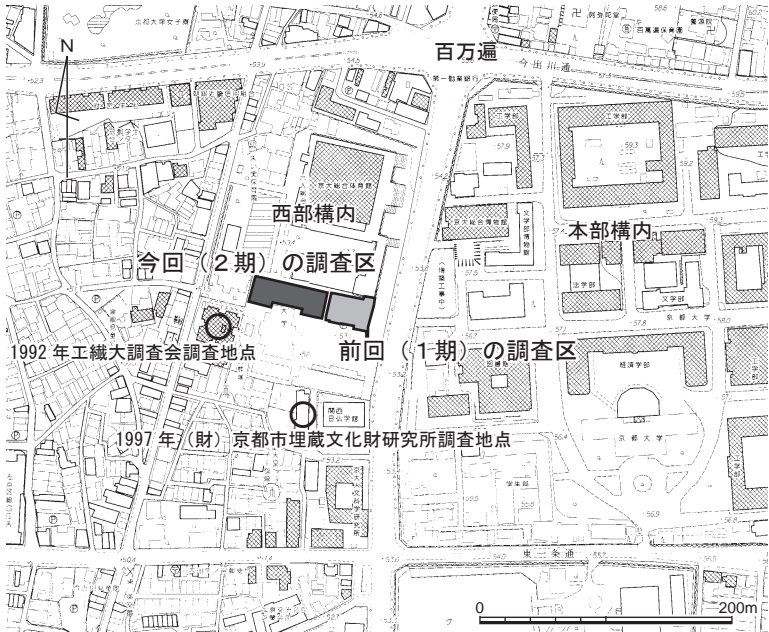


図 1 調査地点の位置（1/6000）

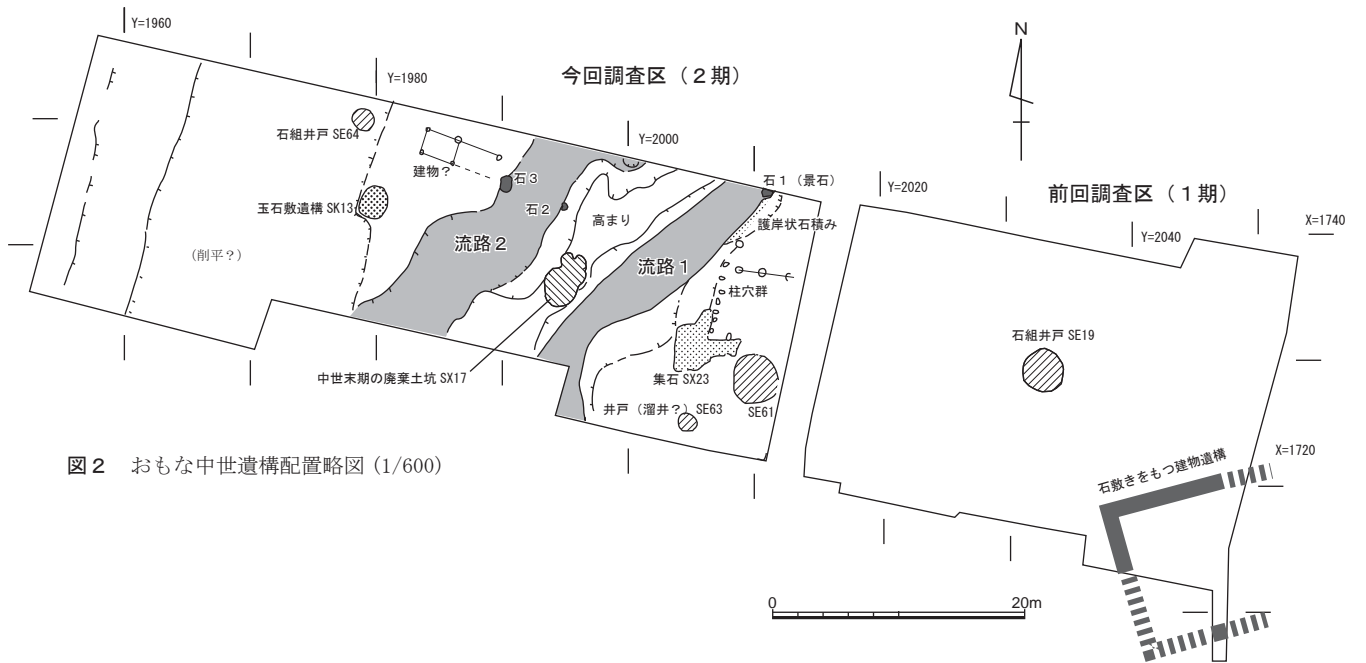


図 2 おもな中世遺構配置略図（1/600）

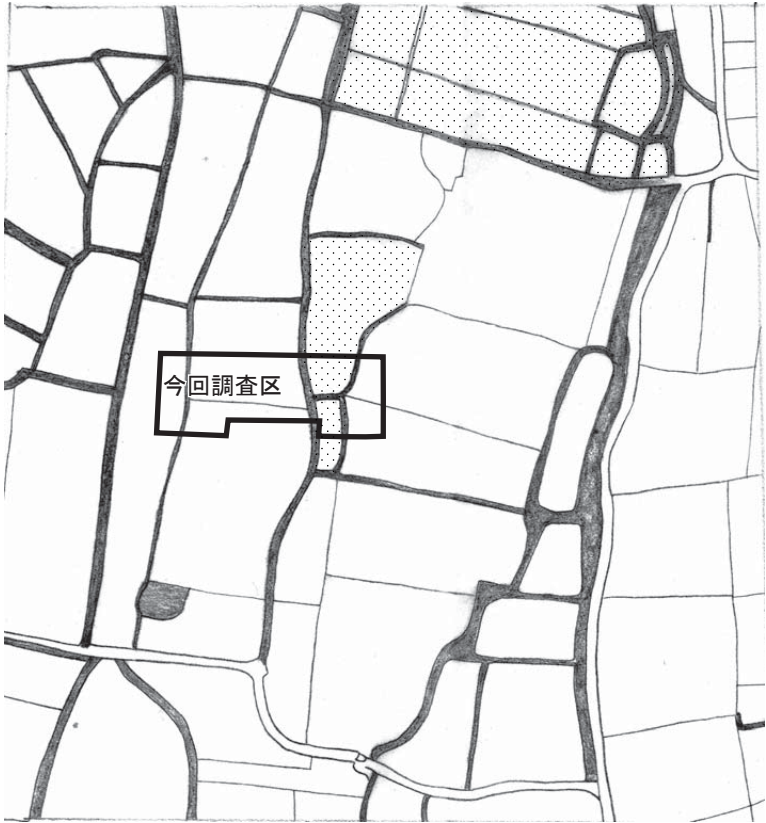


図 3 『山城国吉田村古図』にみる地割りと今回の調査区のおよその位置（縮尺約 1/2000）
梨地の部分が字「和泉」

13 吉 田 村
鴨川の東、昔吉田社西北に泉殿と号する田地あり、水石跡残り。
（一）現在も吉田泉殿町として名残りをとどめている。

15 〔明月記〕嘉禄三年六月三十日
申の時許、（金脱之相（藤原為家）来たる。京戯殊に聞く事なし。相門（西園寺公経）、吉田泉を造営し、已に功を成し寄すと云々。

16 〔明月記〕嘉禄三年七月十二日
昨日、相門吉田泉を造改なされ、移徙屋白すと云々。

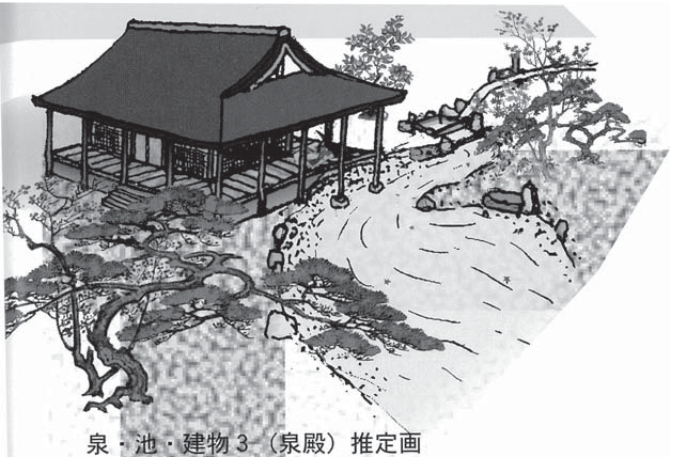
17 〔百練抄〕建長七年六月五日
院（後嵯峨）、吉田泉殿に御幸す。殿上人・御隨身等、五番競馬ありと云々。

18 〔帝王編年記〕文永二年六月四日
吉田泉に於て、公卿・殿上人・御隨身、七番競馬あり。一院・新院、御幸す。

19 〔山城名勝志〕三卷十
鴨川の東、昔吉田社西北に泉殿と号する田地あり、水石跡残り。

『史料京都の歴史 2 考古』平凡社 1983

※嘉禄：1225-1227
建長：1249-1256
文永：1264-1275



『紫式部の生きた京都』
（（財）京都市埋蔵文化財研究所監修・2008 年）より転載

西園寺公経 さいおんじ きんつね（1171～1244、承安 1～寛元 2）
鎌倉中期の公卿。内大臣実宗の子。母は権中納言藤原基家の女。源頼朝の妹婿一条能保の女をめぐり、娘を九条道家（兼実の孫）の妻とし、幕府や摂関家と深い関係をもった。後鳥羽上皇にも信任されたが、1217 年（建保 5）大将の職を望んで果さず、不満の意を放言して上皇に籠居を命ぜられ、將軍源実朝の抗議で許された。この後、上皇は実朝・公経への不信を強めた。19 年（承久 1）実朝の死後、公経の奔走で、道家の子の頼経が鎌倉に下ったが、上皇は討幕の決意を強めた。21 年、上皇が討幕の兵を挙げると（承久の乱）、公経はこれを鎌倉に急報し、上皇に一時幽閉された。乱後は幕府の信頼を背に、太政大臣にまで昇り、閥白道家・將軍頼経との関係に加え、孫の姞子^{ひこ}を後嵯峨天皇の中宮とし、所生の久仁親王（のちの後深草天皇）を皇太子とするなど権勢を極め、また北山山荘（のち、足利氏の手に入り、そこに鹿苑寺、金閣が造営された）を営むなど、豪華な生活を送った。→承久の乱 ㊦ 竜斎：鎌倉時代 下（1957）、上横手雅敬：西園寺公経（歴史と人物 昭和 49 年 12 月号） 〔上横手雅敬〕

『新編日本史辞典』東京創元社 1990